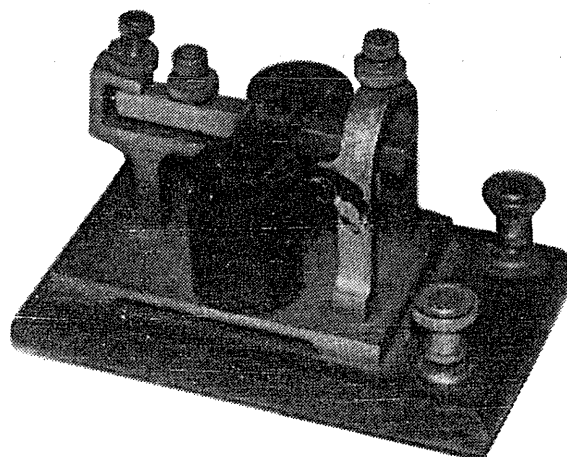
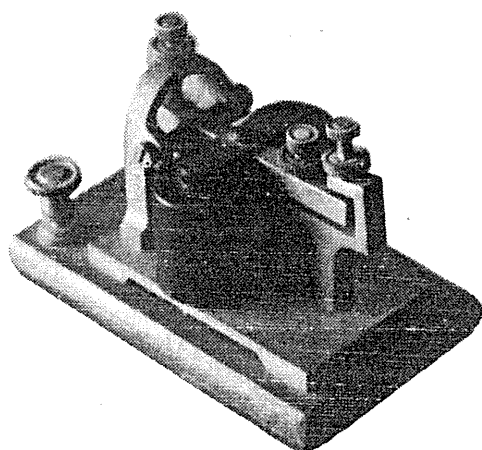


有線通信用音響器



1865（慶応元）年パリで万国電信条約が結ばれてから有線電信が国際的になりました。日本はこの条約に加盟を布告しましたのが1879（明治12）年のことですが、それより早い1869（明治2）年に官用有線電信を横浜で開始、その翌年1870（明治3）年にデンマークの大北電信株式会社に国際通信の免許を与えたので、これでわが国の有線電信が国内及び国際間で事実上始まったわけです。

このために、まず国内規則として1873（明治6）年太政官布告第200号が大日本政府電信規則として制定され公布されました。

簡単に申しますと太平洋戦争が終結した後に、わが国の電気通信に関係するいろいろな法律等が現在のような主旨の内容に変わるまでは、国内の電気通信のほとんどが政府が専掌することになっていました。

国際通信のうちの有線電信の関係については、戦争前から戦争中にかけては大北電信株式会社がそのまま業務を続けておりましたが、戦争中

の1943（昭和18）年に権利が消滅、戦後処理が終わって若干の過程を経て1953（昭28）年から現在のような国際通信が始まりました。

写真は有線電信の受信用として一般に使用されていたもので、電けんを操作してモールス符号に従って信号を送ると、相手方ではこの音響器から発します金属音で受信をしました。

金属音は機器の中心にあります^{こうかん}槓桿がドット及びダッシュの信号によって上部の金属部に当たって発しますが、同時に元に戻ったときにも再び金属音を発するという複雑な音響となります。もっともこの音を更に大きくするためにスタンド型の共鳴箱があってその中にこの音響器が入っておりますが、現在残念ながら残っておりません。この通信方式は戦後しばらくは電報を扱うところ等で使用されていましたが、政府専掌の関係で前身校卒業生でこの業務に従事した方は極めて少なかったと思います。

（本学名誉教授 宮 坂 武 芳）